

インターンシップ(企業委託実習)実施状況紹介

ポリテクカレッジ石川 学務援助課 須郷 将規
(北陸職業能力開発大学校附属
石川職業能力開発短期大学校)

概要：当施設では、平成15年度より実践技術者の専門的知識および技術・技能を習得した2年生全員を対象に約10日間、インターンシップ(企業委託実習)を実施することとした。

職員および他施設等の協力体制のもと、平成15年度・16年度と、インターンシップ実施率100%という実績に結びついた。

1. はじめに

最近の若年者の雇用を取り巻く環境が非常に厳しいなか、さらに職業観・就業意識の希薄化・多様化から、就職早期に離職しての無業状態が社会現象として一段と進んでいる。

このような状態が示すように、若年求職者が社会人としてのマナーや心構えが不十分な者や就労意欲が乏しい者が多く見受けられる。

職業訓練も単なる知識や技能・技術にとどまることなく、職業意識の啓発や自己の職業適性の把握に向け、企業等におけるOJT訓練経験が必要とされ、平成13年度末に当機構能開短大がインターンシップ事業に取り組む計画が示された。

ここに平成15年度および16年度当施設において取り組んだインターンシップ実施状況について報告することとしたい。

2. 目標・目的と計画

当施設では、目的・目標および計画について職員の意思の統一を図り、若年者対策の一環であるインターンシップ事業に取り組むこととした。

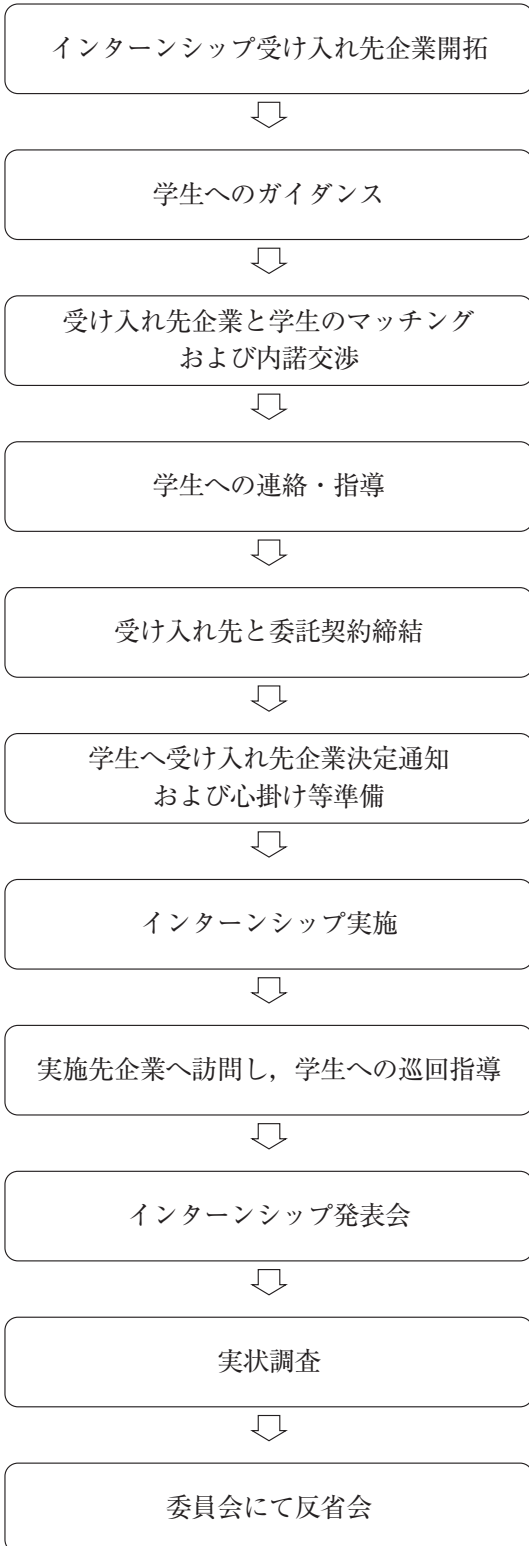
【目標】

- ・2年生全員を対象とし、10日間(2単位)実施。
- ・各科関連業務での企業実習取り組み。
- ・実施期間は、夏期休暇。
(夏期休暇後1週間を猶予期間として設定)
- ・学生寮および自宅から通える範囲にて実施。

【目的】

- ・日ごろの教育訓練にて習得した知識および技能・技術が、現場にてどのように活用できるのか認識することから、自らの能力を確認すること。
- ・企業が求める人材要件の一端を自ら把握し、必要となる能力の習得意欲を喚起すること。
- ・職業選択や職業生活への理解を進め、自己の職業観を養い、就業意識の高揚および就職活動の際、適正な職業選択の参考とすること。

【計画】



4月下旬

……保護者および関係機関へ実施の連絡

5月上旬～6月下旬

……関係機関・事業主団体・企業等訪問

受け入れ調査（協力依頼文等送付）

学生，保護者の独自開拓（6月下旬まで）

……各担任，学務援助課が実施

……学生と担当指導員と懇談のうえ，委託契約締結を推進

……学生自己紹介票の作成

インターンシップ日誌の配布・説明

あいさつ・態度等の指導

6月下旬～7月中旬

……事務局にて委託契約

（他，学生自己紹介票および企業側に記入してもらうスケジュール表・履修状況評価表の送付）

6月下旬～7月中旬

……インターンシップ派遣先明細およびスケジュールの提示

学生は受け入れ先企業の下調べおよび諸準備

7月下旬～9月上旬（夏期休暇期間）

7月下旬～9月上旬

……担任および他指導員巡回

巡回指導報告書の提出（巡回者作成）

9月中旬～9月下旬

……各科にて実施，報告書・日誌の点検および指導

1年生の聴講

9月中旬～9月下旬

……各科にて実施，報告書・成績書の提出

受け入れ先企業パンフの収集，日誌の提出

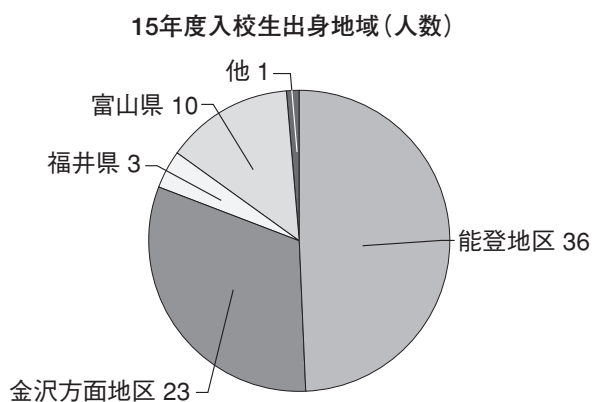
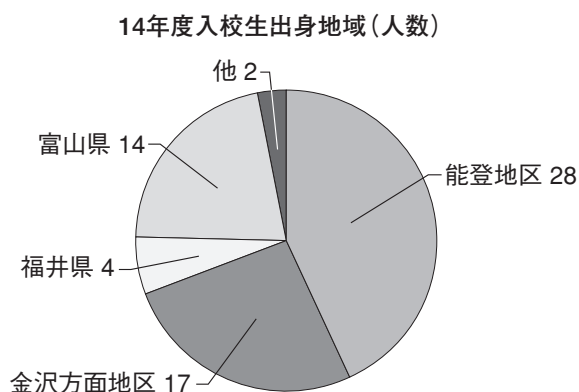
学生が作成したレポートを礼状と併せて企業へ送付

9月下旬～10月上旬

……就職内定率向上へ結びつけ

来年度への申し送り事項

3. 平成14・15年度入校生出身地域



4. 委託企業開拓

4.1 商工会議所との連携

平成15年度より当施設では、七尾市において商工会議所と共同で、会員企業を対象に委託企業開拓を行った。

インターンシップ事業に対して商工会議所側としては、地元企業経営において、重要な資源の1つである若年者の地元企業就業定着を図ることから、人材育成の重要性を鑑み、地元企業への社会的貢献活動の一環としてとらえ、当施設と共に企業開拓に取り組んでいただいた。また、より一層充実した事業となるよう、商工会議所職員・委託企業および学生・短大職員が出席のもと、「インターンシップ・オリエンテーション」を実施した。



写真1 オリエンテーション
(2003.2004 七尾商工会議所広報誌掲載)



写真2 オリエンテーション終了後、委託企業担当者と学生および担任との打ち合わせ

4.2 委託企業への依頼

インターンシップ実施先の依頼・開拓には大きく分けると以下の2とおりがあった。

- 学生との面談等からの企業選定より学生を紹介し、企業とのマッチングを図った開拓。
- 企業からの受け入れ可能学科・人数および期間を受け、該当学生を紹介・依頼を図った開拓。

しかし、企業数が少なく電車・バス等交通機関が発展していない能登地区にて、各学生が通える企業選定・開拓からインターンシップ実施に結びつけるには容易ではなかった。

地域各企業への通常の依頼はもちろんのこと、短大業務でのつながりのある企業、求人票が出ている企業、卒業生就職先企業をはじめ、総務課からも企業紹介の協力を得ることから依頼を行い、出向職員・地元出身職員および北陸地区出身職員の個人的つながりから依頼を行うなど、あらゆるネットワー

クを利用し、企業開拓を行った。

また、機構他施設の協力を得ることからも、企業開拓につながる事ができた。

5. 企業・学生との調整

企業・短大職員・学生に対し、インターンシップは、アルバイトと異なることを明確にし、また、結果として生じる就職や採用は別として、あくまでも就職活動とは異なる取り組みであることを明確にした。

しかし、少数ながらインターンシップは自社への就職活動の一環としてとらえていた企業があり、配慮が必要であった。

学生への言葉使いや態度の指導のほかとしては、以下の点についても指導を行った。

- ・事前の調査で、「食堂利用可」の企業であっても、初日は弁当持参。
- ・スーツにて出勤。
- ・作業着持参。
- ・出勤時間の厳守。
- ・実施中、就職活動等について欠席する場合は学務援助課へ連絡。学務援助課より、事業所および担任へ連絡。
- ・事前に実施先の場所を調べておくこと。
- ・事前に担当者へ電話にて連絡すること。

上記項目の中には、指導など必要ないと思えるものもあるが、実際は電話連絡マニュアルを作成し、学生に渡すなど、徹底した指導が必要であった。

6. 企業より学生へのコメント

6.1 事例1

「習っていないので、できないということは理由にならない」という社長の言葉から、自分から学習する習慣を身につけていただけたらと思います。

「アドバイス」「注意」に対して、なぜそのように言われたのかを考えて理解すれば同じことを繰り返し言われることがなくなります。

仕事に限らず、物事の本質を追求する姿勢が大切

です。

6.2 事例2

事前の学生への指導（インターンシップについての認識・意識づけ）を強くしてください。「企業」で行動するという意識が低いように見受けられました。

当初、生活態度に気になる点もありましたが、日を追って改善され、最終的には、前述について意識していたように見受けられ、積極性も身についたように感じられました。

「あいさつ」「整理整頓」「報告・連絡・相談」は社会人として、企業人として大切なことですから、どこへ就職することになっても常に心掛けてください。

6.3 事例3

初日、私は貴殿に「終わるかどうかを心配するより、どうやって終わらせるかを考えてください。自分なりの完結目標を立てて、それが達成できたときの満足感が味わえなければ、なんのためのインターンシップなのか？ たんなる企業実習で終わらないでください。」と言いましたが、貴殿は最後のあいさつで「業務の達成感を得ることができ、感動した。」と言っていましたね。

感動するということは、感性のアンテナの指向性・感度が高いということで、クリエイティブな仕事をする人間にとっては必要不可欠です。さらに感性を磨いてください。

学生さんたちにこのような研修制度を積極的に活用していただくことを強く希望いたします。

7. 学生の感想

7.1 事例1

実習数日間は、お客様がなんの不満もなく、普通に過ごせる環境をつくるのは難しいと考えていましたが、それでは仕事をやるに当たって失格だと思いました。

普通が悪いというわけではないが、普通というのはゼロ地点であって、そこからのプラスが利益につ

ながると思った。

利益につながるとは、プラス点ばかりに気をかけず、基本のみに執着せず、さまざまな点の結び合いから成り立つと実感できた。これが商売というものに一番大切だと感じた。

また、お金だけでなく、時間・労力の無駄を少しでも少なくして、効率よく仕事を進めることが大切であることを学んだ。

7.2 事例2

最終日に指導していただいた職員の方から、「自分なりの工夫やひらめきを、具体的にしていくことの難しさと楽しさを感じることができたでしょうか？前向きな視点からの工夫と努力は忘れないように」というコメントをいただきました。

多くの人たちのサポートのうえに成り立っているインターンシップから、自ら解決手段を考えることや、積極性・行動力を身につけなければならないと学んだことを、今後の学校生活や就職活動・社会人生活に生かしたいと思います。

従業員の方に迷惑をかけたと思います。ですが、皆さんは嫌な顔ひとつせず、私たち実習生に優しく、そして親切に接してくださいました。

温かく迎えてくださったこと、インターンシップ中の優しい対応にとても感謝しています。

8. 今後の課題

一部学生だが、インターンシップについて理解・認識していないように見受けられ、企業からもそのような声があった。

初年度インターンシップ実施後の各科体験発表会に1年生も出席させ、意識づけを行ったが、今後においても、一層の理解・認識への指導を行うとともに、学生の自主性を得られるよう期待したい。

次年度からは企業の許可を得たうえで、実習風景の写真を撮り、各科でのインターンシップ発表会に使用したいと考えている。また、職員および企業・他機関より、学生の進学・就職決定前に実施するのが望ましいとの声があり、授業との調整が予想され

るが、1年生の終盤等、実施時期についても考えたい。

大学・企業・参加学生の関係者間で、明確な共通認識を持つことが必要である。

今年度（16年度）は他業務との都合から、計画時期より取り掛かりが遅れてしまい、企業の受け入れ準備期間に迷惑をかけ、学生への実習先の割り振り等の準備時期にも影響を及ぼした。依頼等を含む企業開拓は早い時期に取り掛かるのが必須であると実感した。また、インターンシップ受け入れに関する組織的な体制が整っていない企業や、組織と受け入れ担当部署との意識のギャップがあった企業などがあり、インターンシップ定着のための取り組みが、今後の重要課題であろう。

9. 終わりに

複数の学生が同一の業務に取り組んだ際、一人はそれを雑用ととらえ不満を抱き、一人は割り切った考えから黙々と取り組み、一人は環境整備の一環で業務（仕事）としてとらえ取り組んでいた。

1つの物事に対してそれぞれ違った見方があるという当然と思われることを、学生のレポートを読むことから改めて感じ取ることができた。

企業としてもインターンシップとして学生を受け入れることから、学生の感性や視点を生かすことによって、職場の見直しや活性化を促す効果が期待できるところだが、学生の取り組みや考えを知ることから、当施設職員にもさまざまな影響を与えてくれるものであろう。

インターンシップを通し、企業と当施設のつながりが一段と太くなり、企業ニーズを把握し、業務に反映させる可能性が広がることもさることながら、学生が自分に本当に向かい合い、心から打ち込める仕事から働く意欲と励みを見いだして、自らの進路を決められるよう、インターンシップ事業に取り組んでゆきたい。